

## 優秀賞

小さい手

徳島県 助任小学校 五年  
吉本 桜佑

「ただいま。」

いつもは聞こえてくる明るいお母さんの返事が、何度言っても返ってこなかった。こんなことは今まで一度もなかった。

ぼくが不思議に思っていると、となりの家の人がぼくの方へ来て教えてくれた。

「おうちゃんのお母さんね、さっきそこでね、事故にあったから、今病院に行っているよ。帰ってくるまでいっしょに待っていようね。」

ぼくが小学三年生のとき、自転車に乗っていたお母さんに車がぶつかった。元気な声と、笑顔でむかえてくれるお母さんが、いつもあたりまえのようにいたのに、とつぜんいなくなると、不安でさみしくてしかたなかった。そして、お母さんが無事なのか心配で、いてもたってもいられなくて、涙があふれてとまらなかった。

ぼくがぼくでいられないぐらい動ようとして、下をむいて家の庭ですわっていたとき、小さな手がぼくの頭をそっと、やさしくなでてくれた。その手は、とても温かかった。

「おうちゃん、だいじょうぶ。」

ぼくの家となりの三さいの男の子が、ぼくの顔をのぞきこんできた。いつものかわいい、りょういちくんのにこにこした笑顔だった。

ぼくとりょういちくんは、りょういちくんが赤ちゃんのときからよく遊んでいる。いつも見ている、まゆが少し下がったりりょういちくんの笑顔を見て、ぼくは少しほっとした。なんだか心が温かくなった。でも、少しするとまた、お母さんのことが気になって、なみだが出そうになった。ぼくは、お兄ちゃんだから、ぐっとなみだをこらえた。早くお母さんのむねに飛びこんで、だきしめてほしかった。

ぼくがいつものようにキャッチボールをしたり、走りまわったりしないせいか、りょういちくんは、だまってぼくのとなりにすわって、ずっと頭をなでてくれた。小さなりょういちくんのそん在が、とても大きくりっぱに感じた。

ぼくが家に着いてから十分ぐらい過ぎて、お母さんが帰ってきた。たったの十分が、不安のあまり、まるで地球を一周したぐらいの時間がたったかのように長く感じた。

「おうちゃん、お帰り。心配かけてごめんね。」

いつもの聞きなれたお母さんの声だった。すごくほっとして、ぼくは思わずお母さんのうでの中に飛びこんだ。元気なお母さんの顔を見て、いつものぼくがもどってきた。

「おうちゃん、お母さん元気でよかったね。また遊ぼうね。」

そう言って、りょういちくんはぼくに手をさし出した。ぼくたちがいつも「さようなら」をするときにかわす、仲良しのきずなのあく手だ。ぼくは、いつもより強く心をこめて、ぐっと手をにぎった。小さなりょういちくんの手から、大きな愛とパワーをもらった。おかげで、ぼくも強くなれた気がする。

りょういちくん、本当にありがとう。